

フォークナーの修業時代 —薄明かりのニューオリンズ

梅 垣 昌 子

ミシシッピ大学の学生新聞に、“L’Après-Midi d’un Faun”というタイトルの詩を発表してから約5年が経過した頃、ウィリアム・フォークナーは、ニューオリンズに向けて故郷を旅立った。¹ ニューオリンズの港から船でヨーロッパに渡る予定だったのである。おそらく、詩人として「アメリカで認められるためには、まずロバート・フロストのように海外で知名度をあげよう」と² 考えて、フォークナーは3年間勤務したミシシッピ大学の郵便局長の職を辞し、オックスフォードの町を後にした。1925年の年明けにニューオリンズに到着したフォークナーは、乗船の手続きが完了するのを待つ間の短期滞在のつもりで、散文の原稿を出版社に売りつつ、出発までの生活費を捻出する予定を立てた。しかし、結果的には6ヶ月もの月日を、この地で過ごすことになったのである。

ニューオリンズに滞在している半年間に、フォークナーは *Times-Picayune* や *Double Dealer* に散文を寄稿する一方、初の長編小説となる *Soldier’s Pay* の執筆を開始する。また、以前から尊敬していた作家シャーウッド・アンダーソンとの親交を深めると同時に、ニューオリンズに集まっていた文人のサークルとも交流する。フォークナーが処女作の出版にこぎつけた背景には、ニューオリンズで出会ったアンダーソンの大きな存在があった。詩人としての成功の見込みを実感できぬままニューオリンズにやってきたフォークナーは、そこで様々な人間や事物に触れる過程において、小説家へと変貌を遂げる第一歩を踏み出していたのである。実際、ニューオ

リンズ時代のフォークナーの作品を吟味すると、のちに出版される短編や小説につながるモチーフの萌芽が、至る所に発見される。また、フォークナーが追いつけたテーマや、作品の根幹を支える小説手法などについても、その源流を見いだすことができる。

1925年の夏に、ようやくヨーロッパへと船出したフォークナーは、翌年の帰国後、第2作目の小説となる *Mosquito* の執筆にとりかかる。これ以降、彼は次々と短編を執筆し、*Saturday Evening Post* や *Scribner's* などの出版社に送付する。この時期に生み出された作品は驚くべき数に上るが、フォークナーは、これらの短編を組み合わせたり改訂したりしながら、更にこれらを幾つもの長編小説へと構成していった。この時期を中心に執筆された短編作品群は、共通の登場人物や時代・テーマなどによって相互に関連し合い、より大きな長編小説群の中で重要な位置を占めることになる。フォークナーの創作した架空の物語世界であるヨクナパトーフア郡において独特の存在感を放つ、アメリカ先住民に関する作品群も、この時期に構想または執筆がなされたと考えられる。³ 興味深いことに、これらの作品群において、フォークナーがその修業時代を過ごしたニューオリンズという場所が様々な形で登場し、作品に重要な意味づけを与える役割を担っている。

本論では、作家として成功を得たフォークナーの作品に大きな影響を与えることになったニューオリンズという場所が、彼の作品世界の中で重要な位置を占める「インディアン物語」において、どのように扱われているのかということに注目する。具体的には、ニューオリンズが作品の中で担う両義性を明らかにすると同時に、「インディアン物語」に姿を現すジャクソン大統領の象徴性についても考察を加える。

1

フォークナーの作品群の中で「インディアン物語」として言及される5

つの短編に注目するのに先立ち、ニューオリンズにおけるフォークナーの状況について明らかにしておきたい。

フォークナーがニューオリンズを經由してヨーロッパに渡る意志を固めたころ、彼はアメリカの文学批評のあり方に、かなりの不満を持っていたことが窺える。⁴ 彼の詩作品は、ハンス・シェイが記述しているように、“youthful pessimism and sentimental nostalgia, his spiritual yearnings and longings” (Skei, 1981, p.17) が色濃く溢れでているものであった。スウィンバーンやハウスマンに傾倒したフォークナーの詩には、シェリーやキーツ、ヴェルレーヌなどの影響も強く現れており、その独自性が評価されるまでには至っていなかった。

フォークナーは、第一次世界大戦終了後の1919年の秋にミシシッピ大学に籍を置き、前述の“L’Après-Midi d’un Faun”の他にも“Sapphics”や“Cathay”と題された詩を学生新聞に載せていた。“L’Après-Midi d’un Faun”は、*New Republic*に掲載されたものの改訂版であり、“Cathay”は*Oxford Eagle*にも転載された。また、1922年には*Double Dealer*に“Portrait”を発表した。1924年には、友人の Phil Stone の序文をつけて、詩集*The Marble Faun*を出版している。詩作は更に続けられ、かなり後になって出版されることになる*The Green Bough*の準備も進行する。このようにフォークナーは、詩人として出発したのであるが、その前途は多難であった。

しかしフォークナーは同時に、かなり早い段階から散文の執筆も手掛けていた。ニューオリンズに赴く以前に、“The Hill” “Moonlight” “Love” “Adolescence”などを著わしている。シェイは、これらが1920年代初めに書かれたものであると考え、1925年の作と思われる“Nympholepsy”を加えた5編を、フォークナーの修業時代の散文作品群とみなしている。とりわけ“The Hill”に関しては、“transitional text” (Skei, 1981, p.18) と位置づけ、詩人から小説家へと変貌を遂げるフォークナーの軌跡を知るうえでの重要な作品として捉えている。この点をとりあげれば、フォークナーがニューオリンズ時代を契機に小説家へと転向していく下地は、既にミシシッピにおいて

出来上がっていたと言えよう。

フォークナーを小説の執筆へと導くことになった、更に重要なきっかけは、シャーウッド・アンダーソンとの出会いであった。アンダーソンの *Horse and Men* を読んで感動したフォークナーは、友人のベン・ワッソンに、アンダーソンの「*I'm a Fool*」とコンラッドの *Heart of Darkness* は今まで読んだ中で最高の2大傑作」であると話した。⁵ ワッソンは、当時エリザベス・プロールと結婚してニューオーリンズに居を構えていたアンダーソンを訪問してみるよう、フォークナーに勧める。エリザベスは、フォークナーが以前ニューヨークの書店で働いていた時からの知り合いであった。フォークナーはワッソンの提案を行動に移し、1924年にニューオーリンズの地を訪れたのである。⁶

フォークナーが尊敬してやまないシャーウッド・アンダーソンは、ヨーロッパの文化の香りが漂うニューオーリンズのフレンチ・クォーターの魅力にとりつかれ、その思いを他の芸術家たちと共有しようとしていた。アンダーソンの在任当時、バロン通りに本社のある *Double Dealer* に原稿を寄せていたのは、アンダーソンを始め、ロバート・ベン・ウォーレン、エズラ・パウンド、マルカム・カウリー、ソートン・ワイルダー、アレン・テイト、エドマンド・ウィルソンなどの、そうそうたるメンバーだった。このような雰囲気の中でフォークナーは、この地に集まった文人達と親交を結び、ニューオーリンズを題材とした散文の原稿を地元の新聞の日曜版などに掲載することによって、生活の糧を得るようになった。

ニューオーリンズ時代にフォークナーが執筆した散文の小品は、カーヴェル・コリンズにより、1957年に *William Faulkner: New Orleans Sketches* としてまとめられ、出版されている。ここには、1925年の2月から9月にかけて *Times-Picayune* に掲載された16編のスケッチに加え、1925年の1月から2月にかけて *Double Dealer* に発表された“New Orleans”が収録されている。更に、1967年の改訂版からは、1925年に *Dallas Morning News* に掲載された“Sherwood Anderson”を Appendix として追加している。コリンズは、

フォークナーがこの時期に執筆したスケッチの登場人物や設定が、後の小説において、より発展した形で現れていることを指摘し、作品の相互関係の一端を示そうとしている。例えば、“Out of Nazareth”の登場人物は、*Light in August*のLena Groveにつながり、“The Kingdom of God”の登場人物の様子は、*The Sound and the Fury*のBenjyを彷彿させる、といった具合である。

しかし、ここで特に注目しておきたいのは、フォークナーがニューオリンズを描き出そうとした手法の中に、小説家としてのフォークナーの技法を、誠に荒削りながら垣間見ることができるという点である。フォークナーは、ニューオリンズの町を構成するマイノリティの人々を複数とりあげ、彼等の視点を複合的に組み合わせることによって、町の立体像を浮かび上がらせようとしている。一つの視点を提示したあとに、別の視点を重ねて提示することにより、各々の登場人物の世界観は順次相対化されていく。この作業の蓄積によって、フォークナーは自らの故郷を外側から眺め、そこに内包された問題を相対化するという境地を獲得し得たのではないだろうか。この意味において、フォークナーがニューオリンズ時代に取り組み始めた、詩から小説への移行と新たな手法の獲得とは、後のフォークナーの作品世界の構築にとって重要な意味をもつ。また、それを可能にしたニューオリンズという場所そのものも、作品の中に現れる際に重要な位置づけを担うことになる。

以上のことを踏まえ、次にフォークナーの「インディアン物語」におけるニューオリンズの役割について考察する。

2

フォークナーは、ヨーロッパから帰国すると、早速長編第2作目の執筆にとりかかる。その後、周囲との接触を断ち切るようにして、モダニズム的手法を駆使した傑作*The Sound and Fury*を書き終えると、驚くべき数の短編を構想し、世に出そうとする。⁷ 彼は1928年から1931年までの間に、実に

38本の短編作品を出版社に送っている。この中には、すぐには日の目を見なかったものも多い。「インディアン物語」と呼ばれる一連の作品群の大半も、その執筆と構想はこの時期を中心としてなされたと思われる。

フォークナーは、アメリカ先住民を主たる登場人物とする短編作品を5本執筆している。これらはすべて、短編集 *The Collected Stories of William Faulkner* に収められている。この短編集は、フォークナー自身の希望によって6つのセクションにわけられているが、それぞれが“The Country” “The Village” “The Wilderness” “The Wasteland” “The Middle Ground” “The Beyond” と名づけられている。短編集でありながら、各短編がそれぞれの役割をもちつつ緩やかに結合して、より大きな物語世界を作り上げているのである。この中で、アメリカ先住民に関する短編のうち4作品、すなわち、“Red Leaves” “A Justice” “A Courtship” “Lo!” は、“The Wilderness” のセクションに配置され、“Mountain Victory” は、“The Middle Ground” のセクションの最後に置かれている。

上記5作品のうち“Red Leaves” は、比較的スムーズに雑誌掲載が決まったが、それに対して“A Justice” は、とうとう雑誌に発表されることなく、1931年の短編集 *These 13* が初出となった。しかし、両方とも1930年の秋には、*Saturday Evening Post* への送付が完了している。これに対し、“A Courtship” の執筆時期は少し遅いと考えられ、*Saturday Evening Post* への送付記録は1942年になっている。ただし、これは掲載拒否の憂き目にあい、実際に出版が約束されたのは1948年秋の *Sewanee Review* であった。これら3作品は、イッセティッベハの一族を扱った物語である。ただし、イッセティッベハは“A Justice” においてはチョクトーのチーフと説明されているが、“A Courtship” においてはチカソーだということになっている。残る2作品のうち、上記3作品とともに“The Wilderness” のセクションを構成している“Lo!” は1933年の夏に執筆されたと考えられている。*Scribner's* には掲載を拒否されたものの、翌1934年に *Story* 誌に発表された。“Mountain Victory” の執筆時期はそれよりも早く、1930年には *Saturday Evening Post*

に送付されている。ただし実際に作品が掲載されたのは、出版社に拒否されて改訂を施した後の1932年のことであった。この2作品は、ウェデルの家系を扱っている。ただしここにおいても、“Lo!”ではウェデルはチカソーとされているが、“Mountin Victory”ではチョクトーになっている。

このように、上記5作品は、登場人物によって大きくふたつのグループに分かれる。イッセティッベハの家系について、物語の内容から明らかになる事実と、その中でニューオリンズに与えられた位置づけは、次のとおりである。“Red Leaves”において埋葬されるのを待っているイッセティッベハは、“A Justice”において暴君ぶりを発揮しているイッケモチュッベの息子にあたる。イッケモチュッベは、“A Courtship”でその詳細がわかるとおり、若かりし頃に恋破れたあとニューオリンズに出奔するが、7年後に故郷に帰ったとたん、自らを“Doom”と呼び、それはフランス語で“the Man”にあたる言葉であると皆に説明する。イッケモチュッベは、彼の地から持ち帰った毒でチーフとその後継者を殺害し、自分がチーフとなって君臨する。その死後、チーフの座をうけついでイッセティッベハも、父親のニューオリンズ時代の知人のついででニューオリンズに出かけ、故郷の荒野での暮らしにはおよそそぐわないと思われるヨーロッパの文物を持ち帰る。中でも赤い履物に執着し、それはチーフという地位の象徴のごとく扱われるようになる。ニューオリンズの暮らしを体験する前後のイッケモチュッベの変貌ぶりは著しく、“A Courtship”においては、その対比がフラッシュバックを用いて並置され、際立つ仕組みになっている。その様子は、例えば以下のように導入される。

...Ikkemotubbe returned, named Doom now, with the white friend called the Chevalier Soeur-Blonde de Vitry and the eight new slaves which we did not need either, and his gold-laced hat and cloak and the little gold box of strong salt and the wicker wine hamper containing the four other puppies which were still alive, and within two days Mocketubbe's little son was dead and

within three Ikkemotubbe whose name was Doom was himself the Man.⁸

イッケモチユツベは、ヨーロッパの貴族的生活を連想させる事物と同時に、奴隷制度をも故郷に持ち帰るが、語り手が“which we did not need either”と感想を差し挟んでいるように、それは先住民の暮らす環境の中では必要のないものであった。

イッケモチユツベの息子についても、彼とともに荒野にもたらされたニューオリンズの香りは、以下のように語られている。

Issetibbeha returned home with a gilt bed, a pair of girandoles by whose light it was said that Pompadour arranged her hair while Louis smirked at his mirrored face across her powdered shoulder, and a pair of slippers with red heels. They were too small for him, since he had not worn shoes at all until he reached New Orleans on his way abroad. (320)

ニューオリンズの土地と人々から切り離されて、アメリカ先住民の共同体に持ち込まれた品々は、イッケモチユツベが執着する赤い履物が「彼の足に合わない」ことが象徴するように、荒野では無用の文物である。その両者のとりあわせは滑稽であるが、イッセティベハの息子のモケチュツベに関する以下の描写においては、悲愴感さえ漂ってくる。モケチュツベは、イッセティベハの死後、その後継者としてチーフの座についた。チーフとなって初めて、それまで狙っていた赤い履物を自分のものにすることができたのである。

Moketubbe...wore a broadcloth coat and no shirt, his round, smooth copper balloon of belly swelling above the bottom piece of a suit of linen underwear. On his feet were the slippers with the red fan made of fringed paper. Moketubbe sat motionless, with his broad, yellow face with its closed eyes

and flat nostrils, his flipperlike arms extended. On his face was an expression profound, tragic, and inert. (325)

モケチュッベの表情 (“tragic, and inert”) は、活力を失って後退してゆく共同体の有り様を体現しているといえよう。心の内部は空洞化しつつも体面を保とうとする登場人物が、一種の無表情に陥って思考力を失っている状況に対して、フォークナーはしばしば “profound” という形容詞を用いるが、このモケチュッベにおいても、そのアイロニカルな表現が、効果的に作用している。

このように、イッセティベハの一族に持ち込まれたニューオリンズの事物や風習は、もとの文脈から切り離されて、それ自体の意味を失うと同時に、持ち込まれた先の文化を停滞させるという結果を生んだ。一方、ウェデル一族の物語においては、ニューオリンズというモチーフはどのように扱われているだろうか。“Lo!” に登場するチーフのウェデルは、一族を引き連れてワシントンに乗り込み、時の大統領であるアンドルー・ジャクソンと交渉を行う。この作品において、ウェデルとジャクソンの力関係は途中で逆転し、最初は滑稽にみえたウェデルの所作は、次第にジャクソン大統領をも巻き込んで、その論理の破綻を露呈し、読者に対して大統領の資質への疑念を抱かせる結果となる。実は、このウェデルもニューオリンズとゆかりのある人物であり、その詳細が “Mountain Victory” の中で明らかになる。“Mountain Victory” の登場人物であるソーシエ・ウェデルは、南北戦争に従軍した後、故郷に帰る途中で立ち寄ったテネシーのプア・ホワイトの家で夕食をとらせてもらい、自分の出自について説明する。彼は父親について、以下のように話しはじめる。

He was the Choctaw chief named Francis Weddel. He was the son of a Choctaw woman and a French émigré of New Orleans, a general of Napoleon’s and a knight of the Legion of Honor. His name was François Vidal. My fa-

ther drove to Washington once in his carriage to remonstrate with President Jackson about the Government's treatment of his people, sending on ahead a wagon of provender and gifts and also fresh horses for the carriage, in charge of the man, the native overseer, who was a full blood Choctaw and my father's cousin. (759)

ソーシエ・ウェデルは、南軍の将校としての誇りを保ち、自分の家柄の正統性を明らかにするという文脈で、ニューオーリンズに入植したフランス人の血筋を強調している。この作品においては、プア・ホワイトの家族の荒廃した精神の状況と、ソーシエ・ウェデルの哲学的な思索とが対比されており、その背景に、ソーシエの生まれ育った環境が重ねあわされるという仕組みになっている。

もっとも、ソーシエは「ヨーロッパ化」されたことによって従来の暮らしが破壊されることに批判的であった仲間の存在についてふれ、以下のよう

In the old days The Man was the hereditary title of the head of our clan; but after we became Europeanised like the white people, we lost the title to the branch which refused to become polluted, though we kept the slaves and the land. The Man now lives in a house a little larger than the cabins of the Negroes —an upper servant. (759)

ヨーロッパの文化をチョクトーの共同体に移植することに対して“become polluted”という言葉が使用される一方で、ヨーロッパ人とチョクトーの血をあわせ持つソーシエにとっては、その双方の伝統が自己形成の根幹を支えていると考えられる。

3

以上のように、フォークナーの「インディアン物語」においてニューオリンズの位置づけが決して一様ではないことを確認してきたが、最後に、フォークナー自身が見たニューオリンズを、彼がどのように表現したかということに、目を移しておきたい。

フォークナーが *Double Dealer* に寄せた散文 “New Orleans” の最後のセクションは “The Tourist” と題されている。このセクションで、フォークナーはニューオリンズを “a courtesan” になぞらえ、町の雰囲気表現しようとしている。例えば、その様子は以下のように表されている。

New Orleans. A courtesan, ...who shuns the sunlight that the illusion of her former glory be preserved. The mirrors in their house are dim and the frames are tarnished; all her house is dim and beautiful with age. She reclines gracefully upon a dull brocaded chaise-longue, there is the scent of incense about her, and her draperies are arranged in formal folds. She lives in an atmosphere of a bygone and more gracious age.⁹

ここに漂うニューオリンズの香りは、前述したイッセティベハの一族の物語に現れるニューオリンズの雰囲気と相通じるものがある。しかしこれは、ニューオリンズという文脈から切り離して持ち去るやいなや、輝きを失ってしまう類いのものかもしれない。フォークナーは同じセクションを、次のような表現で締めくくっている。

New Orleans...whose hold is strong upon the mature, to whose charm the young must respond. And all who leave her...return to her when she smiles across her languid fan...(14)

魅力を発するニューオリンズは、その一部を持ち去り手元に置く事で輝きを発し続けるのではなく、そこから立ち去り、再び戻る対象となることによって、“an eternal twilight”の中に生き続ける。

このニューオリンズの存在の仕方は、修業時代を経たフォークナーが次々と短編や長編を生み出す中で、それらのテーマとつねに何らかの形で関連し、いろいろな様相を帯びて読者に突きつけられる。ニューオリンズは実在の町でありながら、一種の象徴性を帯びた場所となるのである。

このことは、ニューオリンズが擁する建物や場所についてもあてはまる。フォークナーがニューオリンズ滞在時に下宿していた建物と目の鼻の先に、フレンチ・クォーターの心臓部に位置するジャクソン広場がある。彼がよく足を運んだこの場所からは、シャーウッド・アンダーソンが住むポンタルバアパートをすぐ隣に見ることができる。この広場の中心には、前足を高く蹴りあげた馬にまたがっているアンドルー・ジャクソンの銅像がある。彼は、1812年のニューオリンズの戦いで活躍した。後に第7代大統領となったジャクソンは、当時河川交通の要衝であったニューオリンズに造幣局を建設した。ニューオリンズにゆかりの深いジャクソンは、今や銅像として「遠くを見つめて」いる。日常的にこの銅像を眺めていたフォークナーの手にかかると、それには以下のような表現が与えられる。

Beneath the immaculate shapes of lamps we passed, between ancient softly greenish gates, and here was Jackson Park. Sparrows were upon Andrew Jackson's head as, childishly conceived, he bestrode his curly horse in terrific arrested motion. Beneath his remote stare people gaped and a voice was saying: "Greatest piece of statuary in the world: made entirely of bronze, weighing two and a half tons, and balanced on its hind feet." (46)

“terrific arrested motion”の瞬間をとらえられたジャクソンのイメージは、このあと様々に姿を変え、フォークナーの作品の要所要所で顔を出す

ことになる。

詩人としてヨーロッパで名声を得るための通過地点であったはずのニューオーリンズで、フォークナーは小説家としての礎を築き、約40年後には、ノーベル文学賞を受賞する。詩人としては成功しなかったものの、彼は世界的に認知される作家へと成長したのである。

注

- 1 フォークナーは1919年の秋にミシシッピ大学に籍を入れ、学生新聞に詩や散文を寄稿している。“L'Après-Midi d'un Faun”は、同年の8月に *The New Republic* に発表されたが、その改訂版が、入学直後の秋学期に *The Mississippian* に掲載された。(Hans H. Skei. *Faulkner: The Short Story Career*. Oslo: Universitetsforlaget, 1981. p.17.)
- 2 カーヴェル・コリンズは、*William Faulkner: New Orleans Sketches* の序文の中で、フォークナーの渡欧の動機を、フォークナーの友人であるフィル・ストーンの言葉を引きつつ推測している。(William Faulkner. *William Faulkner: New Orleans Sketches*. Ed. Carvel Collins. Jackson: University Press of Mississippi, 2002. p.xii)
- 3 ハンス・シェイは、フォークナーの膨大な手書き原稿やタイプ原稿、および、出版社への作品送付リストなどを照合し、短編の執筆時期の特定を試みている。中には執筆時期が明確でないものも含まれるが、後述するとおり、「インディアン物語」の多くは、一編を除き、少なくとも1930年代の初頭までには執筆が完了し、出版社に送付されている。(Hans H. Skei. *Reading Faulkner's Best Short Stories*. Columbia: South Carolina UP, 1999.)
- 4 カーヴェル・コリンズは、*Double Dealer* に掲載されたフォークナーの評論を紹介しているが、その中に次のような記述が見られる。“...The English review criticizes the book, the American the author. The American critic foists upon the reading public a distorted buffoon within whose shadow the titles of sundry uncut volumes vaguely lurk.”(William Faulkner. *William Faulkner: New Orleans Sketches*. Ed. Carvel Collins. Jackson: University Press of Mississippi, 2002. p.xii)
- 5 上掲書、p.xviii.

- 6 ミシシッピ川とポンチャートレイン湖に挟まれ、クレセント・シティという別名をもつこの地域は、18世紀の初めにフランス植民地として出発したが、間もなくスペインの統治下に入った。ナポレオン時代に一時フランスの所有に戻ったあと、1803年のルイジアナ購入によってアメリカのものになったが、その後流入したアメリカ人の居住区はフレンチ・クォーターの外に広がり、フランスの文化が息づく中心部はアメリカの他の場所にはない独特の雰囲気をもつ地区となった。ジャズの都としても知られるニューオーリンズに魅せられ、この地に通ったり、活動の拠点にしたりした文人の名前をあげれば、枚挙にいとまがない。オスカー・ワイルドやラファディオ・ハーンを引きつけた町は、ケイト・ショパンやリリアン・ヘルマンを生み、テネシー・ウィリアムズの憩いの地となった。
- 7 シェイは、*The Sound and the Fury*のタイプ原稿の完成をもって、フォークナーの修業時代は終了したと考えている。(Skei,1981, p.29.)
- 8 William Faulkner. *The Collected Stories of William Faulkner*. New York:Vintage Books, 1977. p.363. 以降、引用はすべてこの版により、ページ数は、引用文のあとの括弧内に示す。
- 9 William Faulkner. *William Faulkner: New Orleans Sketches*. Ed. Carvel Collins. Jackson: University Press of Mississippi, 2002. p.14.

Works Cited

- Brown, Calvin S. *A Glossary of Faulkner's South*. New Haven: Yale University Press, 1976.
- Cowley, Malcolm. *The Faulkner-Cowley File: Letters and Memories, 1944-1962*. New York: The Viking Press, 1966.
- Dabney, Lewis M. *The Indians of Yoknapatawpha: A Study in Literature and History*. Baton Rouge: Louisiana University Press, 1974.
- Faulkner, William. *The Collected Stories of William Faulkner*. New York: Vintage Books, 1977.
- Faulkner, William. *William Faulkner: New Orleans Sketches*. Ed. Carvel Collins. Jackson: University Press of Mississippi, 2002.
- Ferguson, James. *Faulkner's Short Fiction*. Knoxville: The University of Tennessee Press, 1991.

- Harrington, Evans and Ann. J. Abadie eds. *Faulkner and the Short Story: Faulkner and Yoknapatawpha, 1990*. Jackson: University Press of Mississippi, 1992.
- Jones, Diane Brown. *A Reader's Guide to the Short Stories of William Faulkner*. G.K.Hall & Co: New York, 1994.
- Skei, Hans H. *Faulkner: The Short Story Career*. Oslo: Universitetsforlaget, 1981.
- Skei, Hans H. *Reading Faulkner's Best Short Stories*. Columbia: South Carolina UP, 1999.